

里地里山とは

里地里山とは、奥山と都市の中間に位置し、
集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、
ため池、草原等で構成される地域概念です。
農林業などにともなう、
さまざまな人間の働きかけを通じて
環境が形成・維持されてきました。

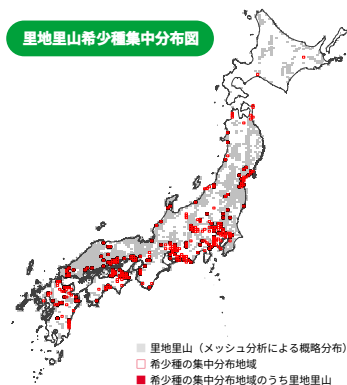


里地里山はメダカやカエル、カタクリなど、さまざまな生きものを育てており、そのなかには絶滅のおそれのある種（希少種）が多く含まれています。たとえば、全国の希少種の集中分布地域の5割以上が里地里山にあたります（右図）。また、身近な自然とのふれあいの場、環境学習のフィールドとしても大切です（右下）。

しかし、近年は薪や炭がほとんど作られなくなり、二次林（雑木林）の経済的な価値がほとんどなくなっています。さらに、農山村では過疎化のために手入れがなされなくなり、一方、都市近郊では開発が進むなど、里地里山の質の低下や消失が目立っています。

このため、平成14年3月に策定された「新・生物多様性国家戦略」では、わが国の生物多様性の3つの危機の一つに里地里山の危機を位置づけ、重点的に取り組むこととしています。

里地里山希少種集中分布図



データ出典：自然環境保全基礎調査、動植物分布調査（環境省）

ふれあい活動団体分布図



データ出典：環境省及び（財）日本自然保護協会の調査より

里地里山の全国分布

里地里山（二次林や農地を主体とした地域）は国土の約4割を占めています。里地里山はその骨格となる二次林のタイプによって5タイプに分類され、それを基に6ブロックに区分されます。

- ミズナラ林タイプ
- コナラ林タイプ
- アカマツ林タイプ
- シイ・カシ萌芽林タイプ
- その他（シラカンバ等）

ミズナラ二次林を中心とした里地里山

放置すると、やがてブナなどの自然林に代わっていく。



コナラ二次林を中心とした西日本の里地里山

人口密度が低く、雪のやや少ないところではタケの繁茂が目立つ。



シイ・カシ萌芽林を中心とした里地里山

タケが繁茂しなければ、やがてシイ・カシの自然林に移行する。



シラカンバ二次林などを中心とした里地里山

放置すると、やがて自然林に代わっていく。



コナラ二次林を中心とした東日本の里地里山

人口が密集していて開発が多く、タケ・ササの繁茂が目立つ。



アカマツ二次林を中心とした里地里山

人口が密集しているが、ため池なども多く、希少種も多い。開発やマツ枯れ、タケの繁茂の問題がある。



二次林

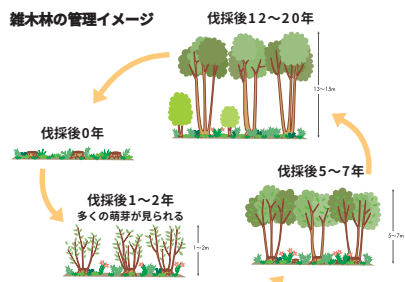
は
いま



里地里山の中心をなす二次林は、薪や炭の材料としてすぐれているコナラ、クヌギ、アカマツなどからできています。かつての二次林はおおよそ10～30年ごとに伐採されていたため、樹木は小さく、明るい環境が広がっていました。このような二次林には、明るい林が好きなスマレ類、カタクリ、シュンラン、ツツジ類、ギフチョウなどがたくさん見られました。

ところが、燃料が薪から石油やガスなどに代わり、二次林の利用・伐採がなくなると、木が大きくなってソヨゴやヒサキなどの常緑広葉樹やササが増え、林は暗くなり、生きものが少なくなっています。

生きもののにぎわいをよみがえらせるために、明るく、手入れされた二次林を作って保つことが大切です。



フデリンドウ



ヒラタクワガタ



メジロ

竹林が里地里山を飲みこむ

タケはタケノコが美味しいためあちこちに植えられ、大切に管理されてきました。ところが最近では、タケノコの自給率が下がり、手入れされていない竹林が増えていきます。

タケのなかでも成長の早いモウソウチクはタケノコから約1ヶ月で20メートルもの高さに達し、まわりの植物を日陰にして枯らしてしまいます。タケノコを採るなどの管理を行わなければ、竹林が1年に最大3～4メートルの割合でまわりの植生を飲みこんでいきます。増え続ける竹林は、これからの里地里山管理の上で最大の問題点かもしれません。



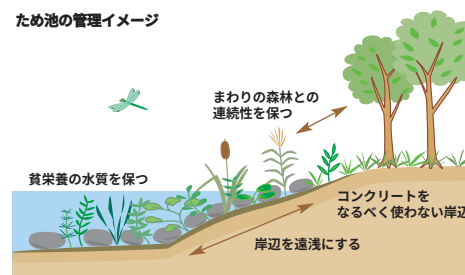
■ タケ分布地域

水田・ため池

は
いま



ため池の管理イメージ



水が豊かな日本では、いたるところに水田が作られ、水田とそのまわりのため池、水路などは、カエルやサンショウウオ、メダカやトンボ、多くの水草にとって重要なすみかになっていました。しかし、減反にともない水田の面積は徐々に少なくなっています。とくに、生きものの多い谷間の水田はまっ先に消えていきました。また、ため池や水路の岸辺がコンクリート護岸に変わることによって、生きものの姿がめっきり少なくなりました。

最近では、生きものが多い水田、ため池を取り戻すために、整備のやり方にさまざまな工夫がなされています。



トウホクサンショウウオ

水辺の外来種問題

人によって他の地域から持ち込まれた生きものは「外来種」と呼ばれ、世界中で問題になっています。里地里山の水辺では、ブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの外来種が広がり、もともと日本にいた生きものを食べたりして生態系に深刻な影響をもたらしています。

ひとたび持ち込まれた外来種を取り除くのはとてもたいへんです。まだ侵入していないところには、絶対に持ち込まないことが大切です。



アメリカザリガニ



ブルーギル



シャープゲンゴロウモドキ



ハッチョウトンボ



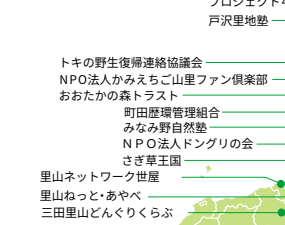
ダイサギ

里地里山を守る

手入れが行き届かず荒れていく里地里山を守るためには、管理の担い手を確保しつつ、土地利用の転換を防いでいくことが重要です。里地里山は「第一次産業の場」ですが、同時に「生物多様性保全・自然とのふれあいの場」でもあります。これからは、この価値をみんなで認めていく必要があります。

里地里山保全活動コンテスト

里地里山の先進的な保全活動を広く紹介することによって、全国の保全活動を推進することを目指し、環境省と読売新聞社は、平成16年6月「日本の里地里山30ー保全活動コンテストー」を開催しました。多くの応募の中から、以下の30団体が選ばれました。（里地ネットワークHP：<http://satochi.net/30/>）



土地の確保

- 地域指定による行為規制
緑地保全地区、都道府県自然環境保全地域等
- 土地の買上げ・トラスト
- 税制措置

管理の担い手確保

- 市民・NPO等の参画
管理協定、市民ボランティア、オーナー制度等
- 管理のための奨励金・直接支払い
- 地域づくり



普及啓発・環境学習

- 体験教室・エコツーリズム等
- 里地里山管理・技術研究等

里地里山保全再生モデル事業

環境省では、平成16年度から全国4地域で里地里山保全再生のモデル事業を開始しました（右図）。

今後、これらの地域では関係省庁（農林水産省、林野庁、国土交通省）、地元自治体、NPO、住民、専門家などと連携・協力して、里地里山保全再生のための「地域戦略」を作ります。そして、保全再生のモデル事業（たとえば落葉かき、タケ除去などの実践、活動拠点と体制の確立、ビオトープなどの整備、環境学習活動の実践など）を進め、これらの取り組みを広く発信することによって、全国の里地里山保全再生活動を促進していく予定です。



里地里山保全再生モデル事業地域

